【08】「音楽療法の実践をまとめる～あなたの LISTEN を聞かせてください～」

【講師】今村　ゆかり

【要旨】

この講座は、認定音楽療法士になって日が浅い方、これから実践記録を何らかの形で報告したり、事例報告／事例研究に発展させていこうと考えている方を対象として、ご自分の実践についてまとめることの意義と、実践をまとめていく時の基本的な手続きについて確認していくことを目的としています。

現場での実践をまとめることは、日々の活動と地続きの作業です。もちろん所属施設・機関内での連絡／報告／相談のためにまとめる場合と、事例報告／事例研究として学術大会などで発表するのでは、取り組み方が少し違ってきますが、どちらにも共通しているのは、音楽療法士が仕事を続けていく時に必要な「自分自身を振り返る」という豊かな作業が含まれているということです。

豊かな作業を、第 25 回学術大会のテーマ「LISTEN」になぞらえて考えてみましょう。私は、LISTEN で、音楽療法士の姿勢を表すことができるのではないかと思い、考えてみました。

L：Learning 学ぶこと／I：Having a interest in　関心を持つこと／S：Sympathizing with 共感すること／T：Tuning with 調和すること／E：Engaging in　参加すること／N：Nurturing 育むこと

例えば、実践経験を一事例の症例報告として構成していく場合には、日ごろ自分が関わっている対象者の方の誰かに焦点を当て、その方との音楽活動場面のどこかを切り取り、自分がどのように関わり、試行錯誤しながら活動を続け、どんな変化を見出すことが出来たか／出来なかったかを検討していきます。

この作業の中で、私たちは誰に／何に共感し（S）、関心を持ち（I）、どのように音・音楽で関わり（T）、音・音楽を媒介としてその場に居合わせることで（E）、どのような関係を育んだのか（N）を言語化していきます。その時には、対象理解やプロセスの分析・評価、音楽での関わりの理論を学び（L）、分析・考察していきます。このような言語化によって、私たちは今の自分の音楽療法観をも振り返ることができます。こうした内省的な作業が、実践をまとめる意義のひとつの側面です。

もうひとつの側面として、「まとめ」を報告や研究にして発信する作業が控えています。発信する場合には、対人援助職の倫理にのっとった発信のルールや、多くの人に現場のことをわかりやすく伝えるための書式などがあります。今回はこうした発信の手順についても考えていきたいと思っています。

【プロフィール】

（医）哺育会横浜相原病院リハビリテーション科　音楽療法士

日本音楽療法学会認定音楽療法士。大学病院神経精神科・心療内科、単科精神病院、精神科クリニック、精神科デイケアなど主として精神科領域で実践を行っている。